



司令官お元気ですか？
古鷹と行く重巡女二人旅今日は海にきています。
戦闘じゃなく純粋な遊びで来るのは新鮮ですね。
親切な男性の方に水上バイク推進爆雷艇に乗せていただけました。
とっても楽しかったです♡



久しぶりにいただいた休暇
たっぷり充電してまたお仕事がんばります♡

「おっ♡おおおおっ♡」

あわれ他人を疑うことを知らない
二人は岩陰に連れ込まれ
パコられてしまいました。

「青葉すごい……」
「興奮してる？ 次は古鷹ちゃんの番だよ」





よしよし…
よく眠ってるな…

上手く青葉を宅飲みに誘い
泥酔させたぞ…

とにかく起こさないようゆっくりと出し入れする。
ゆっくり…ぬちぬちと…ぬち…ぬち…
普通のセックスだったら相手に怒られるような動きだが
青葉の膣はとにかくキツく締め付けてきて、
何より悟られずにこの身体を味わうという
背徳感ですぐに射精してしまわないよう
我慢するので精一杯だった。

「んあ…?」

やばい…起きたか…?



「むにや…しれえかん…ZZZ」

あーくッ
ビビらせんなよ

青葉が他の男の名前を呼んだことで
自制心は一瞬で崩壊した。
張り詰めていた緊張がほどけ、
極限の快楽へと変わる。
抗いようのない快感が
ぞくぞくと背筋を駆け抜けた。

「あっ出る……ッ!!」

他の男の夢を見る青葉に
気付かれないまま種付をする。
吐くほど気持ちよかった。

今から司令官の上官である
元帥の御子息の筆おろしをします。
元帥から司令官に直々に
命令が下ったそうです。

「青葉…つらいだろうが
どうか頼めないだろうか……」

青葉よりもつらい思いをして
いるのは司令官ですよ。ね。
大丈夫です。
青葉は大丈夫ですから。

慌てなくて
大丈夫ですからね…

最初はどうなるか不安でしたが御子息はとてもいい子で、
赤ちゃんのように安らかな顔で青葉のおっぱいを
吸ってくると青葉の母性が疼くようでした。

最初は甘えてただけだった御子息ですが
挿入すると豹変してオスを剥き出しにしました。

これ僕の!!
これ僕の!!

おぼつかない腰つきは童貞というのが嘘ではない証拠でしょうが、
本能で必死に腰を振り青葉に種付をしています。
力任せに打ち付けられて青葉何度もイっちゃいました。

セックスを覚えてたての男なんてみんな猿です。
御子息は他の子ともエッチしたいと当然のように要求してきました。
どう断ればいいものかとガサに相談したら
「衣笠さんにおまかせ! 子供をあしらうなんて朝飯前なんだから!」
と快諾して御子息の元に向かってくれました。

しかし帰りが遅いので部屋を覗きに行くと、布団の上に二匹の獣がいました。
冬の動物のようにぴったりと寄り添って、ほんの僅かな熱も逃さぬように。
奇妙なのは、ガサの腕が御子息を慈しむように抱きしめていることです。

これもボクの!!
ボクのお!!

ぎゃうううっ♡

びく♡

もはや人の形をした獣のようにしか見えない
ソレが自分の身体を貪るのを
潤んだ瞳で見つめ、まるで駄々をこねる弟を
愛おしんでいるかのようでした。

ヌィ
ヌィ

ヌィ

その日青葉は彼に抱かれていました。彼とはカメラを通じて知り合った仲です。司令官のことで相談に乗ってもらったりする内にいつしか心を通わせるようになり、男女の仲になっていました。

青葉の左手には司令官にもらった指輪が光っています。司令官に秘密にして身体を重ねる関係に罪悪感と恍惚を覚えていました。

予定よりだいぶ早く帰って来れた。早速自室に向かう。この時間なら青葉も部屋にいるだろう。「青葉、ただいま——」

「しっ司令官!? ちょっと待っ……!!」

いったいどういうことだ? 目の前の光景はなんなんだ? 俺と青葉の部屋に青葉がいる。それは当然だ。だがこの男は誰だ? 裸で何をしている? 何故俺の妻とベッドの抱き合っている? とつくに答えは分かっていたが、一縷の望みを託して青葉の出方を待った。

「しっ司令官!! これは違うんですっ!!」
そんな月並みな台詞が青葉の口から突いて出るなんて。

身動きが取れず呆然としていたら男が腰の抽送を再開した。

「ふええっ!? なんて!?」
「なんてこの状況で始めるのさ!」

いつも俺には敬語を使う青葉が、この間男相手には気安い口調で話している。

それとも俺が青葉にとっての間男なのか?

逃れようとする青葉を男が後ろから掴み勢いよく腰を打ち付けた。

「ふあああっ♥ばか♥
司令官が見てるんだよ!?
何考えて…あっ♥」

「ふああああん…っ♥
はあっ…ああああ…っ♥」

青葉は俺に見られていることも忘れてるようにひととき激しい嬌声を上げた。

その瞬間俺は敗北を悟った。
青葉の心も身体ももう俺の許にはないのだ。

青葉ちゃんは大本営の機密情報をスクープしてしまったため特警※に連行されてしまった。

どんな処罰を受けるのか怯える青葉ちゃんの目の前に現れたのは愛する司令官と大将閣下たちでした。

「ま、君たちにはこの海の平和を守ってもらっておるからの。誠意を見せてくれれば悪いようにはせんよ。なあにじきに気持ちよくなるさ。さあ…提督くんに覚悟を見せてやりなさい」

「し…司令官…青葉見ちゃいました…お詫びにせい…はい閣下にご奉仕して司令官の元に帰るので見ていてください…」

「聞いたかね提督くん。せっかく青葉くんがこんなやる気を見せてくれているんだ。彼女の健気な姿から目を逸らすんじゃないぞ」

「それではまずワシから…ほれもつと嬉しそうにせんか。ワシのチンポは凄じやろ。君が進んでやっとなるんだからの？」

「そうじゃそうじゃ。ワシらが無理強いしとるみたいで気分が悪いじゃろ」

「も…申し訳ありません。青葉は閣下の太くご立派なおチンポを押し付けていただいて嬉しくてたまりません」

「君らのためを思つて寛大な措置をしてやろうと言うのに。嫌なら別に無理しなくてもいいんじゃぞ？」

「わはは、なんとも頭が悪そうじゃが殊勝な心がけじゃ」

司令官…
青葉は大丈夫です…

「おっやってますね。
自分も混ぜてくださいよ」

「お……お前……」

この方は……司令官の同期の方です。
司令官の顔が今までにないぐらい歪みます。
でも同期の方はむしろ見せつけるように
青葉に性器を押し付けてきます。

「おほほ、すっかり飛んどるわい」

「提督くん見ておるかね。
青葉くんのこの蕩けた顔。
もうチンポのことしか考えとらん顔じゃな」

「青葉くんも好き者じゃのう。
もう提督くんのことなんかより
チンポに夢中なんじゃないか？」

「どうかね青葉くん？
君の献身的な態度にワシらはすっかり感服してしまった。
君が望むならワシらはもうここで終わりにしても構わんのだかの？」

「おうすまんな。
しかし大将閣下から来るよう命じられてな。
こんな美味しい話乗らないわけないだろう」

司令官が絶望に打ちひしがれるなか
大将さんたちよりも形も臭いもマシな同期さんのソレに
少し安心してしまっている青葉がいました。

「あ……青葉は責任を持って
最後まで閣下たちのお世話を
させていたきたいです……」

「青葉……」

「わはは、聞いたかね提督くん。
彼女はワシらとまぐわいたいそうじゃよ。
どれ、よければ君も参加するといひ。
ワシらの後でよければ君にも使わせてやろう」



「よ〜っし！
衣笠さんいいところ見せちゃうわよ!!」
「おおー!!」

「宴もたけなわ、たまたま入った居酒屋の
隣の席で飲み会をしていた男たちと
意気投合した青葉と衣笠のテンションは
最高潮に達していた。」

「あはは！ガサッてば大胆過ぎい〜!!」



「えっ…ええ…青葉もですかあ…?」
「酒が入っているとは言え
従来の自信のなさは変わらない。
そんな青葉を周りが囃し立てる。」

「いいぞお〜!! 脱げ脱げ〜!!」

「酒は判断を鈍らせる。
青葉は言われるがまま
脱ぎ始めてしまった。」



本来であれば姉妹でやるような行為ではないが、酒によって冷静な判断力など、とつくに吹き飛んでいる。

「ほら二人とも」「フランクフルトだよ」「俺のも食べて食べて!!」

男たちの差し出す肉棒を二人で同時に舐め、手でしごく。

「あはっ青葉、こっちは肉汁がすこいわよ」「えう…んむ…ちゅば…ん…こっちも凄い系引いてる…」素面だったとしても言えないような台詞を吐き出す娘たち。酔っているのは酒か、空気か。

「ええ…?」

「ここれ大丈夫かなあ……」

男たちの要求はどんどんエスカレートし、とうとう性交を求め始めた。

「なにいつてんのよあおばあこおんなデカパイぶらさげてえ…あははめっちゃかたち変わるう」

段々お酒が抜けてきて内心すこしまずいと思いつつも強く断ることが出来ずに結局媚困り笑顔で応じてしまう。

翌日、衣笠は綺麗に記憶をなくしていた。

今日は青葉が便器係の日です。
衣服をすべて脱ぎ人間便器になり
利用者のみなさまをお待ちします。

尿に貴賤なし。
高級将校から雇員まで
どんな方のおしっこでも
受けなければいけません。

鎮守府のみなさんのおしっこを青葉が受け止めます。

手早くトイレを済ませたい方には
直接口をつけて飲ませていただきます。
狙いをつける手間をかけさせてはいけません。

用を足し終えた後は
そのままおしやぶりして
きれいにお掃除します。

ペロペロ...

出されたものは
しっかりと飲み干します。
吐き出したりこぼしたら
床を舐めて拭き取らないと
いけないので出来る限り
飲み込みたいですが、

んぐ...

胃の底からこみ上げてくる臭気に
耐えきれず吐き出してしまします。
便器係のお仕事には慣れでも
この臭いにはなかなか慣れません。

近代化回収に失敗したら何故か幼女化してしまった青葉ちゃん

青葉ちっちゃくなっちゃいました。

ミ

おお、
なんにも生えてないの
新鮮ですねえ

松輪ちゃんの服借りて見ました♪
似合いますかあ？



「司令官どうですかあ？
なんだか新鮮でしょ
もはや児ポですよこんなの」

「ほらほら司令官
さすがの性欲モンスターの
司令官でもこの姿には
欲情しないでしょ」

この姿に欲情しちゃったら
犯罪ですよハ・ン・ザ・イ♥



そんなもん
欲情しないわけ
ないだろうが!!!

おっ

おっ

おぐっ

おっ

おっ

Comic Market 108

青葉ちゃんは大本営の機密情報をスクープしてしまったため特務に連行されてしまった。

どんな処罰を受けるのか怯える青葉ちゃんの目の前に現れたのは愛する司令官と上官でした。

「し…司令官…青葉見ちゃいました…お詫びに頑張って閣下にご奉仕して司令官の元に帰るので見ていてください…」

「聞いたかね提督くん。せっかく青葉くんがこんなにやる気を見せてくれているんだ。彼女の姿から目を逸らすんじゃないぞ」

「しっ司令官!!
こっこれは違うんですっ!!」

そんな月並みな台詞が青葉の口から出るなんて。

「ふああああんっ…
はあっ…ああああ…っ」

青葉は俺に見られていることも忘れひとときわ激しい嬌声を上げた。その瞬間、俺は敗北を悟った。青葉の心も身体ももう俺の許にはないのだ。

「んあ…?」

やばい…起きたか…?

「むにゃ…」

あークソ
ビビらせんなよ

他の男の夢を見る青葉に気付かれないまま種付をする。吐くほど気持ちよかった。